

第35回  
庄内浜の  
珍魚はく製と  
魚拓展

1階 城輪柵跡展



ホシセミホーボー

- 開催期間 1985年12月4日～1986年1月26日
- 開館時間 9時30分～16時30分
- 休館日 月曜日・祝日・年末年始(12/29～1/3)
- 入館料 大人100円・児童生徒50円

**酒田市立資料館**

酒田市一番町8-16 TEL 0234 (24) 6544

## はく製について ————— 伊藤 継雄

魚の学術的な標本はほとんど液漬けにするのが常識であるが、大形のものには保存がむずかしいので「はく製」の方法が用いられる。学校教材や博物館の展示には「本はく製」の標本もかなり見受られる。特に「全身はく製」は技術を必要とするのと、参考書がないため一般には、あまり製作されていないのが現状です。

このたび展示した作品は、私なりに研究を重ねた結果であり作品を見ますと、その経過が歴然とわかります。

見学するにあたって、特に二つの特徴的なところを見ていただければ幸いです。

1. 魚体には一切キズをつけないので完全な魚体を保っている。
2. 目は生きたままの丸みのある作り方をしているので生きているように見える。

「はく製は標本なり」という観念を脱却して芸術的な作品として製作にあっている。

## 魚拓について ————— 早川 聴秋

釣り人口は今や二千万人ともいわれ、今後益々盛になるようです。釣人に欠かせないものは釣果であり、その記録が魚拓となるのです。特に大物、或は思い出となる釣魚には、日時、場所、全長、目方など、時には天候、状況を記載した魚拓が作られる。

これは、主に直接法によるもので、魚に直接墨などを塗り紙、布などに写し取る版画の技法です。

近年魚拓の技術も進歩し、色彩魚拓も散見されるようになった。これは、間接法魚拓と呼ばれる拓本をとる技法が用いられています。魚に紙を密着させてタンポ（綿を絹で包んだ、テルテル坊主）という道具に絵の具や墨を吸いこませてたたきだすものです。

庄内地方には、日本最古の魚拓や、古いものが収蔵されています。錦糸堀の鮎、天保10年(1839)。川鮎、安政2年(1855)。最上川の鯉、安政4年(1857)。その他、古いものがありますがこれは、本間美術館理事佐藤七郎氏によって発表され、最近では釣魚大図鑑(世界文化社)にも記述してあるので、魚拓発祥の地としてより一層全国的に知られるようになりました。

今回展示されている魚拓では、故中山賢士先生の「せいご」明治37年9月中瀬第三沈床。加藤彦三郎氏の「黒鯛」昭和14年8月旧両羽橋下。登藤広氏の「鱸」昭和60年6月南突堤全長105糎。金子均氏の「黒鯛」昭和60年11月北港鉤素0.6号、などは釣師にはいろいろな点で興味があると思い特記しました。

庄内地方は、朝日・月山・鳥海山などの山々があり、溪流、最上川などの河川、そして日本海や飛鳥を有し四季を通し恵まれた自然があるため多くの釣場があり釣場も豊富で、魚釣りが盛になるのはごく当然です。

必然的に魚拓も多くなり、より立派な魚拓が残されていくと思いますが、これは私一人だけではないと思います。